

## UAE人女性が初めてキリマンジャロ登山を達成

### 渡邊大使夫妻が祝福



ナワル・ホーサニーさん（左）とルバ・ハッサンさん（右）  
渡邊大使夫妻と公邸にて

3月7日、渡邊大使夫妻はナワル・ハリーファ・ホーサニーさん（アブダビ・フューチャー・エナジー社（マスダル）・サステナビリティ部アソシエイト・マネージャー）とルバ・ユースフ・ハッサンさん（アブダビ執行評議会事務局社会開発アドバイザー）を公邸に迎えました。彼女たちは、今年2月7日、平地からそびえ立つ独立峰としては世界で一番高いタンザニアのキリマンジャロ登山をUAE人女性として初めて達成し、大使夫妻より祝福を受けました。

ナワルさんと親友のルバさんは、彼女たちの冒険、その冒険が彼女たちの生活感にどのように影響を与えたか、また日本と日本文化に対する彼女たちのイメージについて大使夫妻に熱心に語りました。また、彼女たちが乗り越えた困難と過酷な環境に触れながら、困難に打ち勝つ上での決意というものの大切さについて、また彼女たちが如何に現在の生活のあり方を見つめ直したかを教えてくれました。

彼女たちは渡邊大使より贈られた日本の写真集を開き、その中の富士山の美しい写真を見て、次は富士山を新たな目標にしたいと考えています。また、日本は常に彼女たちにとって大好きな国の一つであり、是非とも訪れてみたいところであるとのことでした。

それでは、ナワルさんとルバさんが渡邊大使夫妻に語ったエピソードを以下ご紹介します。

**問：なぜキリマンジャロ登山を決意したのですか？**

答：実際、特に意識して決断した訳ではありません。ただ、ルバと私はかつてケニアを旅したことがあり、それ以来ずっと、「いつかキリマンジャロに登りたいね」と話していたんです。それで、結局、ただ夢見ているだけではいつまでたっても夢を現実に変えることはできない、そういう当たり前のことに思い至りました。それで、今回の登山を決断したという訳です。ともかく、行動をおこさない限り夢は現実にはなりません。ただ、ルバの妹ライラは、そんな冒険をとて心配していました。というのは、2006年に幾つかの悲劇的な事故があり、我々が用いたキリマンジャロ登山ルートは一旦閉鎖されてしまったからです。でも、結局は、私たちは敢行を決意しました。



キリマンジャロにて（ルバさん（左）とナワルさん（右））

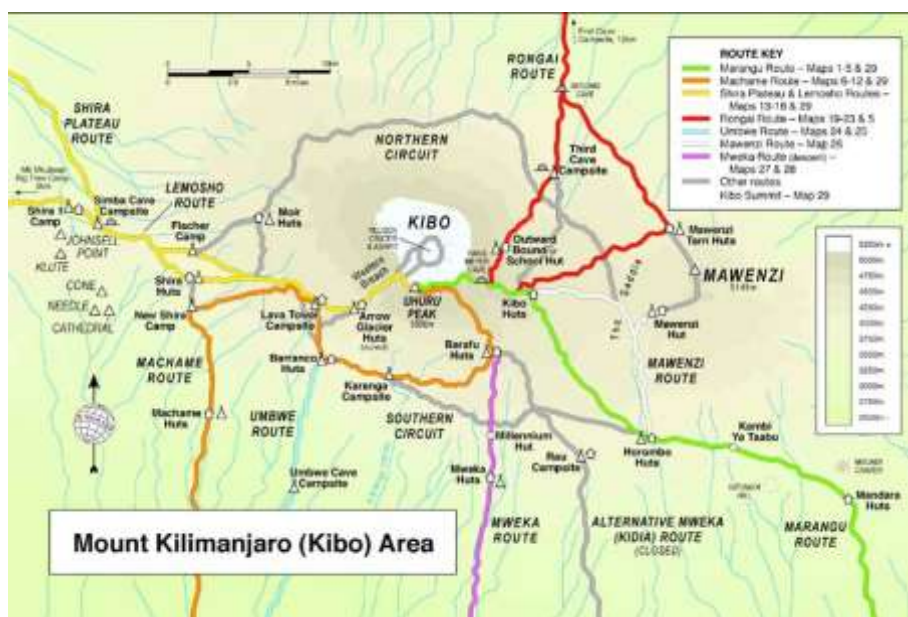
**問：登山に向けどのような準備をしましたか？**

答：登山を決断してから、約3ヶ月間、毎日2時間から3時間のトレーニングを受けました。本格的な登山の練習はオマーンのグリーン・マウンテンで行いました。これに加えて、キリマンジャロ山頂に到達した自分達の姿を想像したイメージトレーニングを試みました。例えば、ルバは登山前に私に宛てて、キリマンジャロ登山旅行から帰ったあとの日付で、登山の素晴らしい経験を詳しく語ったメールをくれたんです。こうやって、私たちは体力的にも、また精神的にも、自分達自身を励ますことができました。

**問：登山中に遭遇した困難があればお願いします。**

答：もちろん、登山は困難の連続でした。私たちはまずドバイからケニアのナイロビ空港に降り立ち、その後タンザニアのキリマンジャロ空港に飛びました。そこから登山開始です。

登山に際しては、最も静寂ながらも大変困難である Lemosho ルートを選びました。最初の夜は Forest Camp、2日目の夜は Shira 1 Camp に、3日目の夜は Moir Hut に宿泊しました。その後、4日目と5日目の夜は Lava Tower Camp、そして非常に凍てついた6日目の夜は Arrow Glacier Camp に泊まりました。下山には、Mweka ルートを用い、Barafu Hut で昼食を取ったあと、7日目の夜に Mweka Camp に宿泊しました。



キリマンジャロの登山ルート一覧

*Climb Mount KILIMANJARO* (<http://www.climbmountkilimanjaro.com>) より

登山者は全員、現地のガイドを伴う必要があります。実際のところ、彼らのアシスタンスは不可欠なものでした。私は、3度、雪に覆われた急斜面で足を滑らせたのですが、冗談抜きに、私はその時々死の間際にあっただけです。本当に有り難いことに、私が滑る度に、タンザニア人のガイドが私を引っ張り上げてくれたんです。彼らはまた、私たちの重い荷物を背負ってくれたばかりか、登山者らに不可欠な栄養、特に炭水化物を豊富に含んだ食事を振る舞ってくれました。彼らにはとても感謝しています。

いずれにせよ、我々は厳しい天候の中で、サバイバルすることで精一杯でした。私たちはしばしば氷点下30度にも達する環境の中で凍えていましたし、またテントの中で眠るというのは初めての体験でした。私たちはそれぞれ、たった1メートル四方の小さなテントで休んだのです。

問：登山中にあった面白いエピソードがあれば教えてください。

答：登山前、私たちは頭上を飛んでいる美しい鳥に感動していました。そして、タンザニ

ア人のガイドの1人が、それぞれの登山グループにはいつも一羽の鳥がずっと付き添って飛んでくるのだと教えてくれたのですが、私たちは最初それは冗談だと思いました。しかし、実際に登山を始めてみると、首が白いカラスが最終日までずっと私たちのあとを付けて飛んできたのです。それは、私たちにとって安心感を与えてくれました。

また、何人かのタンザニア人ガイドは、マサイ族の人達でした。マサイ族とは、ケニアとタンザニア北部に居住する原住民族です。彼らと様々な困難を共有したおかげで、我々は彼らのユニークな習慣や文化、そして伝統について理解を深めることができました。それはとても得難い経験でした。

**問：山頂に到達したときの気持ちは如何でしたか？**

答：もちろん、山頂からの眺めは格別でした。山頂の標識に辿り着くやいなや、それまでの全ての苦労を忘れ去りました。そして、困難な旅の末にアッラーがここまで我々を導いてくれたことを感謝し、感激のため涙を流しました。ところで、面白かったことに、山頂で日本のテレビ取材陣と、名前は忘れましたがある日本人女優に会ったのです。20日間にわたって、その日本人達はキリマンジャロの様々な風景を取材していました。

登山に到着したあと、私たちは、決意は人々がいかなる困難にも打ち勝つことを可能とするとの思いを新たにしました。そしてこれこそが、私たちが人々に発したいメッセージなのです。



氷点下の環境に耐えるナワルさん

**問：今回の冒険によって、人生に対する見方に何か影響はありましたか？**

答：はい、もちろんありました。幾分、生活の中での仕事に対する私たちの見方に変化があったと思います。登山する前までは、私たちにとって仕事は常に、家族や友人そして社会生活よりも高い優先順位を占めていました。ところが、キリマンジャロの厳しい自然に触れた今では、人生は仕事以上のものであること、つまり、世界にはもっと見たり経験したりすべきことが仕事より沢山あることに気付いたのです。それと、どうやら私たちは仕事において直面する困難な事態について、以前よりもより楽に受け入れられるようになったと思います。

ご存じの通り、今日、UAEの国民はとても裕福な生活スタイルに慣れていて、生活において不便や困難に遭遇することはあまりありません。めったに歩く必要すらない程です。しかし、私たちが思うのは、このような恵まれた環境と生活スタイルに依存したままでは、我々は忍耐して何かを成し遂げようとする決意を持つことの重要性を、得てして忘れてしまいがちだということです。この意味で、私たちはキリマンジャロにおいて、自分達の生活のあり方を見つめ直す貴重な機会を得たと思います。私たちは登山中多くのことを耐え忍びました。化粧もしなければ、電気も水もありませんでした。しかし、それらがなくても何とかなることに気付きましたし、また人生の本当の価値とは何かについて、大切な教訓を得たと思います。

**問：キリマンジャロのエピソードはさておいて、日本と日本文化に対するご意見をお聞かせ下さい。**

答：昨年のラマダン月中に、MBCテレビが放映した有名なテレビ番組「アル・パワーテイル」において、日本の文化、特に日本社会における高いモラル・スタンダードについて紹介されました。実際、この番組は、若いUAE国民の間で一種の日本ブームを起こしたのです。番組では、例えば、日本の学校の生徒達がどのように先生達を敬っており、逆に、先生達もどのように生徒達を大切にしているかが紹介されました。番組はその中で、日本社会に深く根付いた他者を尊重する習慣を指摘していました。他者への尊敬は、イスラム文化において重要とされる要素の一つでもありますので、我々にとっては印象深いものでした。私たちはまた、日本人は自分達が他人に迷惑をかけた場合に心から謝るということを知りました。謝罪という行為はそれ自体、他者への尊敬だと思います。

番組からはまた、日本社会が障害をもった人々に格別の注意を払い、そういった人々が可能な限りスムーズに生活を送れるように配慮していることを知りました。道路には、目の不自由の人々のために、特別のマークが記されていることなどです。これは、我々が日本から学ぶべき非常に重要な点だと思います。またこの関係で、私たちは日本人がこのような高いモラル・スタンダードを有することを可能としている、日本の社会システムについて関心があります。



問：最後に、次の冒険の目的地を教えてください。

答：次は是非とも日本の富士山に挑戦したいと思います。できれば、今年の夏には登りたいですね。いずれにせよ、日本は常に私たちにとって大好きな国々の一つですし、是非訪れたいと思います。その際には、日本の伝統的な行事や祭りなどにも参加できれば嬉しいです。

私たちは、本日このような機会を与えて頂き嬉しく思います。また、渡邊大使夫妻の暖かい歓迎、特に私たちの冒険を讃えて、UAE人の女性らに力強い声援を送って頂いたことに感謝しています。本当にありがとうございました。



キリマンジャロ山頂にて（ナワルさん（左）、ルバさん（右））